

5月歴史文化クラブ研修会
解説資料

- 解説資料① 概説「丹後王国と日本海文化」
- 解説資料② 籠神社（丹後一之宮元伊勢）・大宮売神社・竹野神社
- 解説資料③ 古事記・日本書紀に見る古代丹後と大和のつながり
- 解説資料④ 丹後半島の古墳
- 解説資料⑤ 古代の鉄と遠所遺跡
- 解説資料⑥ 丹後七姫伝説に思う

歴史文化クラブ
丹後委員会

(平成28年5月23日、24日)

歴文資料その①

概説 丹後王国と日本海文化

《北ツ海の道と日本海文化》

対馬海流の洗う日本海沿岸は、古来より海外文化流入の窓口である。特に、新羅、高句麗、渤海などの大陸諸国との交流は、日本海ルートがメインであった。沿岸には海流によって多くの潟湖が形成され、これらが良好な港となって、文物交流の拠点となった。これらの港を中心にして、弥生時代後期から古墳時代にかけて、「イズモ」「タニハ」「コシ」とよばれたクニグニが成立し、これを支配した首長が存在し、それぞれの固有の祖先系譜を持っていた。

①「北ツ海の道」

日本海域の対馬海流とリマン海流に乗って、太古の昔より南北から様々な文物が流入してきた。考古学的には、九州から東北にかけて多くみられる縄文時代の玦（けつ）状耳飾は中国江南地方と同類のものとされ、弥生時代の日本海域に出土する土笛（陶埴：とうけん）は中国古来の楽器である。稲作の伝播も、北九州から青森県の津軽半島へ直接に及んだことも指摘されている。

海の道は日本海域の東西の交流も促す。神話に大国主命が越のヌナカワ姫を妻問い裏付けるように、姫川流域でとれる翡翠の勾玉が、出雲大社の境内から出土した。

また、出雲東部に早くから発達した玉作りは、それをうけ弥生期の越前で独自に発達し、さらに次の時代には他地域へも影響を与えた。これらの広域の取引に従事した海人集団や、丸木舟に波除けをつけた「準構造船」の存在があったとされている。

②「潟湖」とそれを支配する地域勢力

日本海域には諸河川の河口に季節風によって砂州が発達し、多くの潟湖ができた。西の出雲から東北の出羽（秋田県）まで潟が並んで、それらは古代の良好な港となった。出雲の「神門の海」、伯耆の淀江、越前の敦賀、越中の氷見、丹後（京都府）の竹野川の河口などは、古代の地形を復元すると、今の市街地は潟湖であったことが分かる。潟湖を支配する政治勢力が生まれ、発展し独自の文化が形成された。潟湖の回りを見守るように支配者の古墳群が築かれたのである。

③「独自の日本海文化」の形成

日本海域には、ヤマトはもとよりほかの地域とも異なる特徴をもつ独自の文化が形成された。たとえば、巨木文化や、玉作り文化は特有のものであり、神話の世界で麻央、『出雲国風土記』では、大女神（大穴持神・大己貴命）が一貫して「天の下造らしし大神」であり、独自の国造りの神「オミヅヌ神」が国引神話に登場する。『記』

『紀』にみえない出雲の神々の系譜には独自の神話体系が創出された。

(参考：門脇禎二『日本海域の古代史』、藤田富士夫「古代の日本海文化」)

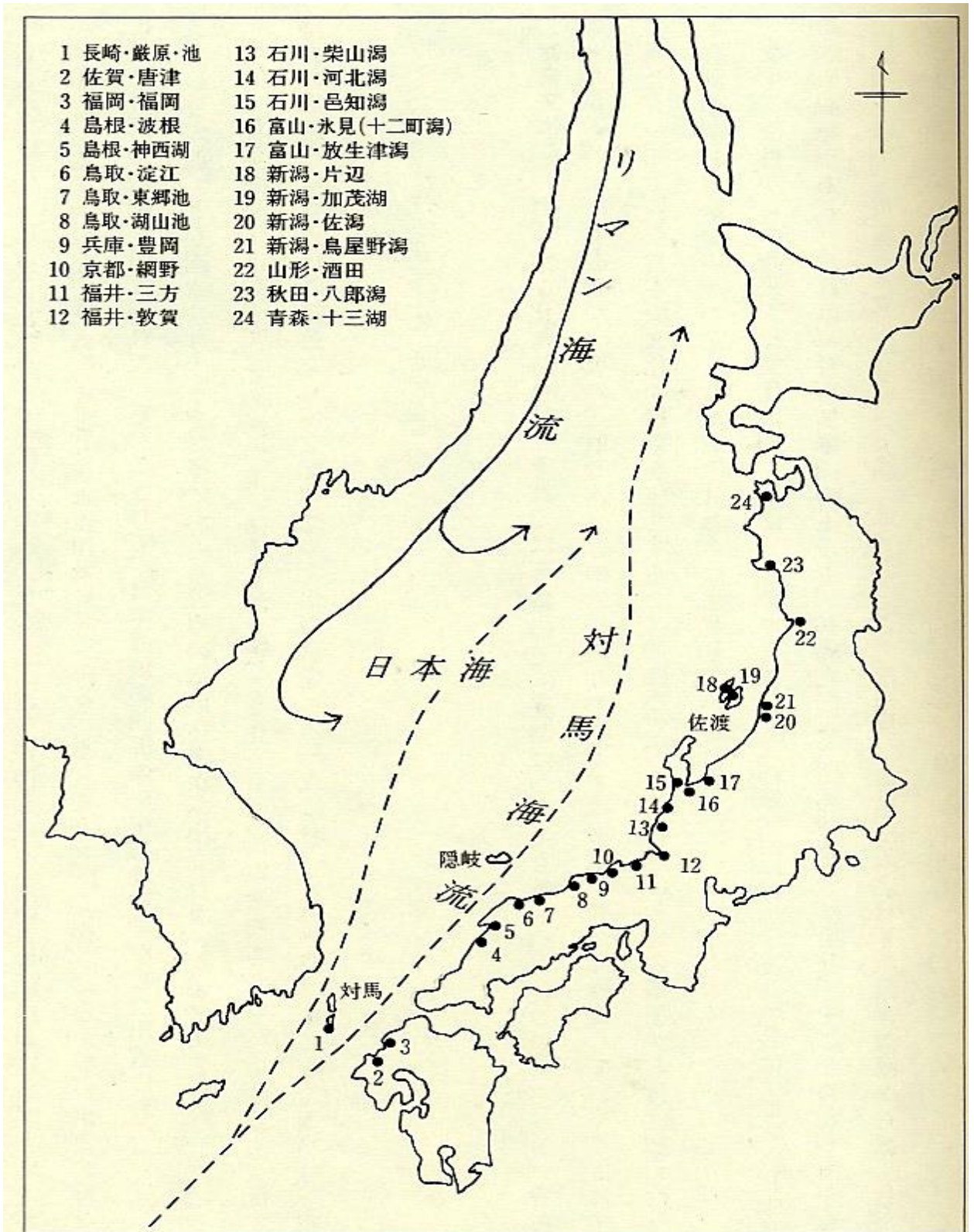
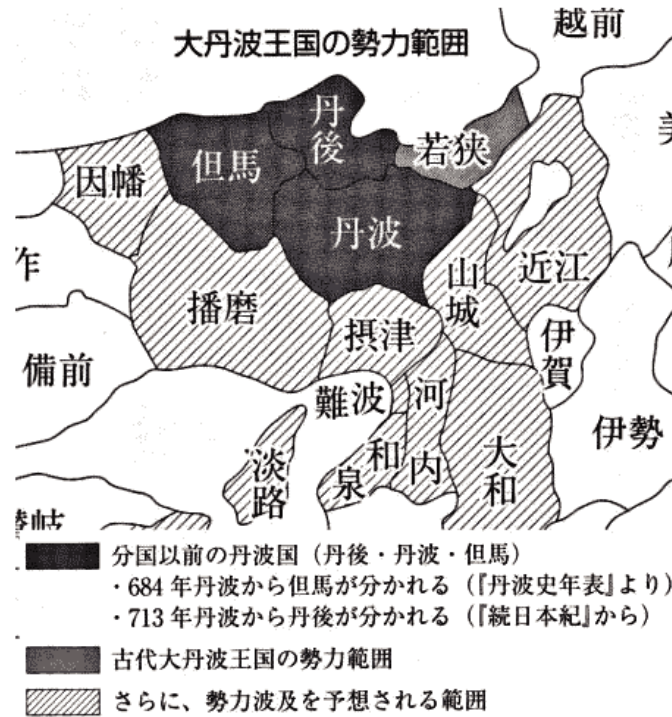


図48 日本海の潮流と湯湖

《古代丹後の歴史について》・・・門脇禎二「丹後王国論序説」より

ヤマト国家にとっての日本海域の最も古い区分は、イズモ（出雲）、タニハ（丹波）、ワカサ（若狭）、コシ（越）である。タニハは律令制の国名でいえば丹後を中心とし、丹波と但馬を含めた範囲である。7世紀律令制国家の成立に伴い、北西部を但馬国に編入し、和銅5年北部5郡を丹後国として分離したが、現在の丹後地方こそが元の丹波国の中心であった。大和国添下郡の奈良山を越えて山城国に入り相楽郡や綴喜郡を木津川沿いに北上して訓郡から老ノ坂を越える丹波道は古山陰道と呼ばれた。



(一)、『丹後王国の世界』

門脇禎二氏や森浩一氏の著書によれば、「タニハ」と言われた丹後半島には、弥生時代から古墳時代にかけて、「丹後王国」とも称される 強大な勢力が存在していたとされる。丹後王国の発展の背景には、潟湖という天然の港の存在があった。久美浜湾、離湖、阿蘇海など現在も存在している潟湖のほかにも、福田川河口の浅茂川湖や竹野川河口の竹野湖が復元されており、これらの天然の良港を拠点として、中国大陸や朝鮮半島から先進的な文物の流入があり、これが丹後王国の繁栄をもたらしたと言う。以下、両氏の著書を参考にし解説を試みたい。

1、弥生時代後期の丹後

丹後は、山の斜面を階段状に削りだした「方形台状墓」と呼ばれる特有の墓が多く築かれた地域である。埋葬施設には多くの鉄製品や豊富なガラス玉が副葬された。特にこの時代の鉄の出土量が北部九州に次いで多い地域となっていて、当時、日本には製鉄の技術がなかったため、鉄は主に朝鮮半島からもたらされたものと考えられる。

2、弥生時代終末期の丹後

赤坂今井墳丘墓（京丹後市峰山町赤坂）には、ガラス勾玉、ガラス管玉、碧玉製管玉を組み合わせた豪華な頭飾りが出土した。ガラス管玉には古代中国で使用された「漢青（ハンブルー）」という顔料が含まれていたことから、丹後地域の盟主的首長の墳墓であった可能性が高いとされている。

3、古墳時代丹後の最盛期・・・丹後王国が存在

古墳時代に入り、丹後には6000基の古墳が築かれ、4世紀中葉から5世紀前半には日本海域最大の前方後円墳が出現する。丹後王国である。その支配は、竹野川流域を中心とし、西は川上谷川流域、南は氷上郡（現在の兵庫県丹波市）、東は野田川流域に及び、丹後王国は最盛期を迎える。

①大田南古墳群

3世紀後半に築造された竹野川上流の、大田南古墳群（大小の円墳・方墳からなる総数25墓の古墳群）は、竹野川流域における古墳時代前期の、有力者の墓域であることが明らかとなった。中国後漢鏡の「画文帯環状乳神獸鏡」と中国・魏の年号である青龍三年（235年）という文字を刻んだ「方格規矩四神鏡」が出土して、邪馬台国の女王卑弥呼の鏡ではないかと話題を集めた。

②最盛期を物語る三大古墳

4世紀中葉から5世紀初めにかけて築かれた丹後三大古墳である蛭子山古墳（全長145m）、網野銚子山古墳（全長198m）、神明山古墳（全長190m）は、まさに大王クラスの規模で形も類似しており、ヤマト王権（三輪、佐紀）との関係を推察させる。

これらは、いずれも潟湖を見下ろす位置にあるところから、日本海沿岸の（港）礁湖を支配した丹後王国が存在したという主張の論拠となっている。

朝鮮半島との交易ルートに加え、鉄の加工技術を中心に器、農具・漁具、木工具などの生産の一大中心地となり、これが政治勢力を支える基盤となったものと思われる。

③丹後王国の衰退

5世紀初頭、ヤマト国の政権は三輪・佐紀を中心とする政治勢力から河内を中心とした政治勢力に移行する。難波に港を持つ河内政権は吉備国、筑紫国を支配下に置き、朝鮮半島への海の道は瀬戸内海ルートに重点が移る。また、大型帆船が出現して日本海の海の路は、よりヤマト国に近い敦賀経由へと変わり、三輪・佐紀の政権と密接な関係で繁栄した丹後王国の衰退がはじまったと考えられる。

④ヤマト王権下のタニハ（丹後）

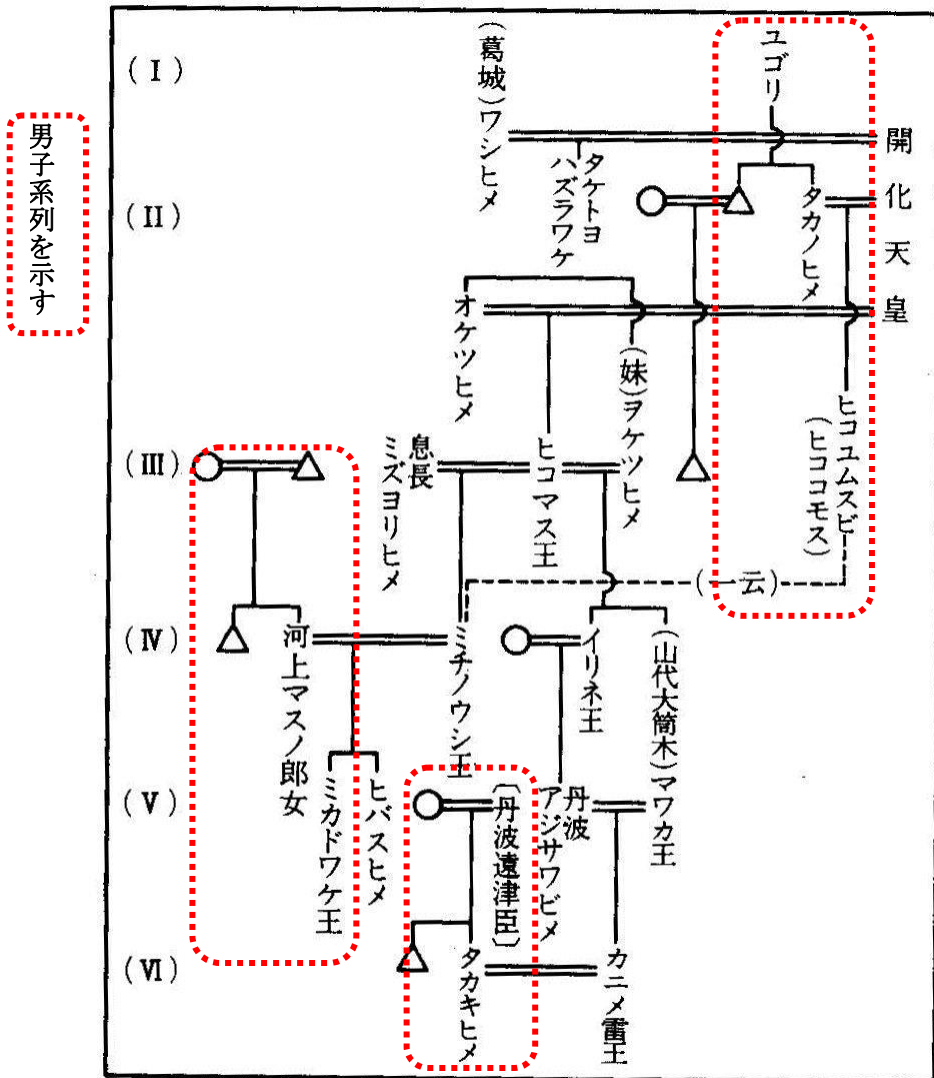
6世紀に入ると、ヤマト国のイヅモ征討の前工作として丹後王国（タニハ）に強い政治圧力が加えられ、完全にヤマト国家の支配下に入ったと考えられる。因みに、丹後の天女伝説から生まれた豊宇賀能売命（とよかのめのみこと）は丹後の多く

の神社に祭られる女神であったが、雄略天皇の時代に豊受大神として伊勢神宮の外宮に移し祀られたという伝承がある。祭神が遷座されることは、政治的な大きな変革があったことを物語っている。丹後国一之宮「籠神社」に残された海部氏系図によると応神天皇の時代に「海部直」姓を賜り国造として仕えたことが記されている。

(注)『古事記』や『日本書紀』の関連記述

イ、「タニハ」首長の媛と天皇との婚姻

- ・巨波大県主由碁理の娘・竹野媛と9代開化天皇の後となる。
- ・(開化天皇の孫)丹波道主王たにば、ちぬしのおうきみと河上摩須郎女かわかみのますいらつめとの婚姻。
- ・その娘日葉酢媛(ひはすひめ)は垂仁天皇の皇后となり景行天皇を生む。
- ・南山背から近江にかけて丹波との関係を示す伝承が多く登場する。



ロ、四道将軍の一人として「丹波道主王」丹波に派遣。(崇神紀)

- ・紀では「丹波道主王」は日坐王(開化天皇の子)の子とされるが、一書には竹野媛の孫ともいう。地方の首長の先祖をヤマトに結びつけた例か。

ハ、雄略紀

- ・丹波国余謝の浦嶋子伝説
- ・丹波国浦掛の水門に逃亡した蝦夷の記事

二、ヤマト国のイヅモ国征服との関連記事として

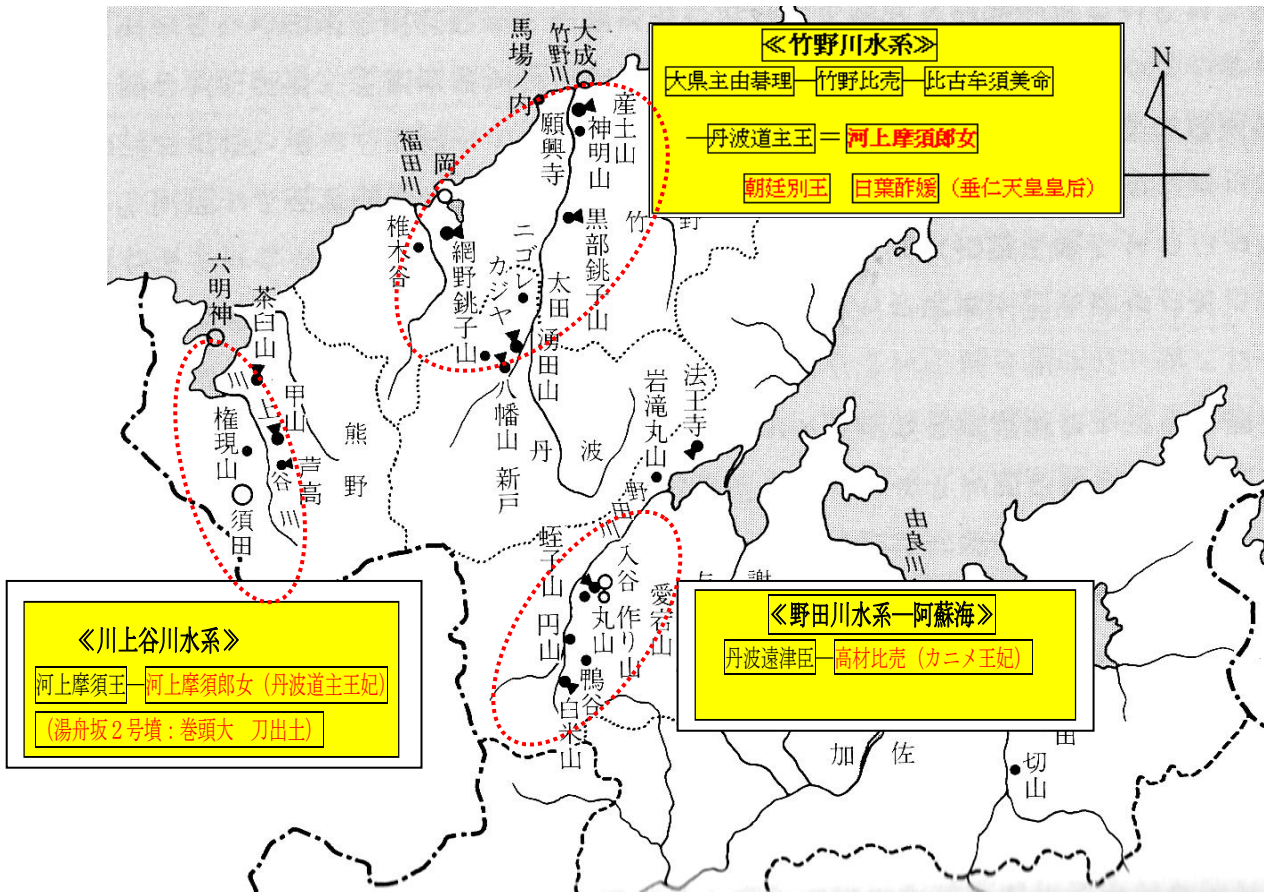
- ・丹波氷上の氷上香戸辺の言上（崇神紀）
- ・丹波桑田ミカソが八尺瓊勾玉献上（垂仁紀）
- ・丹波、但馬、因幡における土師氏私民部の進上（雄略紀）

2、「律令制度の下での丹波」

- ・天武天皇十三年（685年）に「但馬」を分国として独立させた。
- ・元明天皇・和銅六年（723年）に加佐・与佐・丹波（今の中郡）竹野・熊野の五郡を割いて「丹後」の国がつくられた。（今の京都府は三つの国に分かれて、山城国（八郡七十九郷）、丹波国（六郡四十九郷）、そして丹後国は（前記の五郡三十四郷）であった。）

（参考文献）「日本海域の古代史」門脇禎二、「京都の歴史を足元からさぐる」森浩一
 京都府立 丹後郷土資料館HP、京丹後市教育委員会HP

4世紀～5世紀前半の古墳分布



丹後半島研修会資料②・・・・・・・・・・・・・・・・（2016年4月作成 中井弘）

籠神社（このじんじゃ・丹後国一宮・元伊勢）

かつての参道である天橋立を渡れば、伊勢の故郷が見えてくる。

元伊勢の由緒正しき社を前に在りし日の大神を思う

（週刊日本の神社より）

《縁起とご祭神》

籠神社の主祭神・彦火明命（ひこほあかり）は、高天原から葦原の中つ国へ天降ったとされる「瓊瓊杵尊」の兄神である。

「先代旧事本紀」によれば、同神は饒速日命と異名同一神とされるが降臨の地に違いがある。「先代旧事本紀」には饒速日命は瑞宝十種を授かり、後に大和朝廷を支える豪族の祖先となる 32 人の武将神と 25 部の物部軍団を従えて生駒ヶ峰「磐船神社」に降臨、その後大和国鳥見の白庭山に遷られた。

一方彦火明命は「海部氏勘注系図」によると息津鏡と辺津鏡を授かって、籠神社の東方海上 20km に浮ぶ冠島に降臨され、大和国および丹波地方を開拓し丹波国を治める丹波国造となったという。その他の祭神は伊勢神宮外宮に祀られる豊受大神、海神（わだつみのかみ豊玉毘売）、天水分神（水神）。

《本殿》・・・・・・・・（伊勢神宮の様式にのつとる神明造で有形文化財）

社殿の高欄に並ぶ 5 色の据玉は格式の高さを表し、籠神社と伊勢神宮だけである。棟札によると弘化 2 年（1845）の建造とされる。創立年代は養老 3 年（719）に奥宮（現真名井神社の地）の磐座で祀っていたものを現在の位置に移し創建したと伝えている。

《神代の始祖から祭祀を司る海部氏》

彦火明命は丹波（丹後）地方を開拓した海部氏の祖神で、現在の当主は 82 代宮司の海部光彦氏。代々海部氏に伝わる息津鏡・辺津鏡は約 2000 年前の前漢・後漢時代のもので、発掘出土ではなく代々継承されて残っているのは極めて珍しい。

海部氏は丹波国造として丹後や若狭の海人族を統率し、国の政治も担っていて、大和朝廷と密接な関係があった日本最古の家柄である。

籠神社に伝わる国宝「海部氏系図」「海部氏勘注系図」は平安時代に書かれ 1200 年の間、秘して守られてきた日本最古の豎系図である。信憑性の高い史料で、海部氏の歴史だけでなく、古代丹後の実相から古代日本の歴史の謎にも迫るものである。

《元伊勢伝承》

現在「伊勢神宮」の内宮に天照大神が、外宮に豊受大神が祀られている。

神武天皇以来、天照大神の御霊代である「八咫鏡」は天皇の御殿内に祀られていたが、崇神天皇はその神威を畏れ、皇女・豊鍬入姫命に託して御鏡を倭国笠縫邑（現檜原神社）に遷宮される。その後崇神天皇 39 年に笠縫邑から丹後真名井の「吉佐宮（よさ）」に遷宮され、ここで 4 年間お祀りした後、垂仁天皇の時代に皇女・倭姫に託して伊勢に遷られた。

豊受大神は神代から真名井原に祀られていた、五穀農耕の神・丹後の祖神であったが、雄略天皇の時代に伊勢に遷られた。「籠神社」と奥宮「真名井神社」が伊勢神宮の「内宮」と「外宮」の元宮であり、「元伊勢」と呼ばれる所以である。

垂仁天皇の後となった比婆須比売（書紀では日葉酢媛）は、丹波道主王（たにはのみちぬしのみこと）の娘で、海部直氏の祖先にあたり倭姫命を生んだ。大和と丹後の血脈をもつ倭姫命は天照大神が伊勢に鎮まるまでその巡幸に仕え、最初の斎宮（伊勢神宮に奉仕する巫女）となった。

大宮賣神社（おおみやめじんじゃ）

主祭神・「大宮賣神」は天皇を守護する宮中八神殿に祀られる神々のうちの一柱で、織物と酒造を司る女神。「若宮賣神」は食物・穀物を司る女神で、豊受大神の別名。

草創年代は不明だが、境内から出土した多数の遺物から弥生時代の頃より、古代天皇家につながる祭祀が行われていたとされ、稲作民による祭祀呪術的な権力を持つ豪族の国、大丹波の祭政の中心地だったと考えられている。

延喜式では名神大社に列し、貞観元年（859）には従五位の神階を賜っている。旧本殿は元禄 8 年（1695）に建てられたとされるが、昭和 2 年の丹後大震災で損壊し、昭和 5 年に再建された。本殿脇の 2 基の石灯籠は鎌倉時代の刻名があり、国の重要文化財である。また境内そのものも「古代祭祀遺跡」として京都府に指定されている。

長野正孝氏は著書「古代史の謎は海路で解ける」で、以下要約の仮説をたてる。

この地方を最初に支配したのは「丹波風土記」によれば、朝鮮半島からの帰化人とされている。彼らは舟で竹野川を上り、現在の弥栄町、峰山町を抜け、大宮賣神社から舟を曳いて山越えするルートをつくった。竹野川河口から 20km の距離、山を越えた野田川河口の大風呂南遺跡までは一日の距離と短い。

この神社は丹後半島の中心とも言うべき交通の要衝に位置していた。神社の周辺は湧水が豊富で、その湧水を利用して造られた港があり、大きな交易所があったと思われる。竹野川に沿って製鉄や玉造工場の遺跡が発掘されており、大きなコンビナートが出来ていたのである。西方からは朝鮮半島の鉄鋌、ガラス玉、出雲の勾玉が、東からは翡翠や黒曜石を積んだ多くの船がここに繋がれ、市が立ち多くの物資が交換されていた。昔の船は普通に陸を曳いて移動していた記録がある。

竹野神社（たかのじんじゃ）

祭神は天照大神。第9代開化天皇の妃であった竹野媛は、丹波縣主由碁理の娘と記紀に名前が残っている。（「縣主」は大和朝廷の氏姓制度のひとつ）

同社の創祀は竹野媛が晩年、郷里である当地に帰り、天照大神を祀ったことに始まる。延喜式によれば名神大社に列せられている。境内摂社の齋宮神社には竹野媛と開化天皇の皇子「日子坐王命」（ひこにいますきみ）、「建豊波豆良和気命」（たけとよずらわけ）の三柱が祀られている。国難の際には境内から神箭・白羽の矢が飛び出し、事変が治まると飛び戻るといわれている。社宝に磨古親王の具足と第31代用明天皇の草笛がある。宮司桜井氏の祖先は磨古親王の従者であったという。社殿の右には磨古親王の別宮がある。

竹野神社の後には神明山古墳があり、その形式は奈良北部の佐紀盾列古墳群の「日葉酢媛陵」（垂仁天皇妃）と酷似しており、被葬者は丹波道主命か竹野媛ではないかといわれている。

丹後半島研修会資料③

I 「古事記」「日本書紀」に見る古代丹後と大和のつながり

(2016年4月作成：中井弘)

1. 古代日本国建国に貢献した丹後王国

大和朝廷によって統一される以前には、丹後など日本各地に大小のほぼ似たような文化を持つクニがあり、そのクニを統率する王が居た。「続日本紀」の和銅6年(713)4月の条に「丹波国の5郡を割きて 始めて丹後国を置く」という丹後国分置の記事が見える。この「丹後王国」の勢力は多大なもので、後の大和政権の基礎作りに関与し、古代日本建国の初期の段階に貢献した勢力であった。

2. 記紀にみる天皇家との婚姻

- 1) 古事記をみると第9代開化天皇の妃に丹後の姫が上っており、「且波の大県主、由碁理の女、丹波竹野比売を娶りて・・・」とある。
- 2) 第11代垂仁天皇の条には久美浜を根拠地とした河上摩須郎女(かわかみのますいらつめ)と丹波道主命が結婚して比婆須比売(書紀：日葉酢媛)など5人の姉妹が生まれたが、全員垂仁妃となり、そのうち長女の比婆須比売は皇后となり、後の景行天皇を生んでいる。
- 3) この時期の記紀の物語で、倭王一族との婚姻関係が詳しく記されている地域はヤマト周辺以外では極めて珍しい、邪馬台国を中心とする政治連合が成立した2世紀末から3世紀中葉に、且波の首長たちが倭王に同盟・服属した。彼らの中で「且波大県主由碁理」や「丹波道主」は傑出した大首長だったのでなかろうか。

3. 丹後の古墳と大和の古墳との類似性(「京都府の歴史」森浩一・朝尾直弘共著から)

佐紀古墳群の中の「日葉酢媛陵(4世紀末 古墳時代前期終り)」と「網野銚子山古墳」はその形状がそっくりで、「蛭子山古墳」も非常に似ている。「神明山古墳」は「神功皇后陵」(4世紀末～5世紀初め)に近い。つまり丹後半島の三大古墳は佐紀古墳群の被葬者と深い関係を持ち、倭王一族に次ぐ地位にあった人物の墓と考えられる。

4. 丹後王国がどのように「大和国」の支配下にはいったのか

1) 天皇が皇族以外の氏族と婚姻関係を結ぶのはなぜか

敵対関係ないし緊張関係にあるからこそ婚姻が利用された。表向きは融和と見せかけての服属化である。ことに国家作りをはじめたばかりの時期であれば、なおさ

ら政治的意図は濃厚であった。崇神天皇が紀伊国造の娘、尾張連の祖先の娘、物部氏の血を引く大毘古の娘などと婚姻関係を結び、次の垂仁天皇が丹波国から5人の姉妹を迎え入れているのは、大和国内外勢力を掌握する上で最も有効な手段であった。

2) 天皇家が丹後国の女性を妃としたのはなぜか

皇統にとって妃とする女性を丹後国の系統とした理由は、内陸に位置する大和国にとって古代日本の表玄関であり大陸文化の受容の窓口位置した丹後国は、必ずや押さえておきたい王国であった。出雲制圧との地理的關係（四道將軍・丹波道主命を派遣するほどの重要地域であり、大和から出雲への最短ルートに位置する）からも丹波の重要性を理解する必要がある。

II 古代日本の表玄関・日本海

元国交省港湾技術研究所部長・長野正孝氏の著書「古代史は海路で解ける」から古代丹後を読み解く。その論旨は以下の通り。

1. 丹後半島横断運河と「鉄の道」「翡翠の道」

1) 日本海は古代より「北ツ海」と呼ばれ、富山県糸魚川で採れた翡翠が丹後を経て対馬海峡を渡り朝鮮半島まで運ばれる「翡翠の道」があり、逆に鉄は半島南部の伽耶から博多に渡り海岸線を丹後に至る「鉄の道」があった。

2) 北九州から山陰地方の海岸線には10~30km毎に小さな潟湖がある。しかし丹後半島の海岸線では西の久美浜から東の舟屋まで船が寄り付けない長い崖が続く。手漕ぎ船であった当時、夜には船を陸揚げして休んだり、時化を避けるための潟湖が無いと丹後半島を回り込むことはできない。そこで長野正孝氏は仮説を立て、竹野川を上流まで遡り、大宮売神社辺りで船を陸揚げして曳いて分水嶺を越え、大風呂南遺跡を経て阿蘇海に出る、丹後半島をショートカットするルートがあったとする。これを「丹後半島横断運河」と命名している。

3) 手漕ぎ船はどのような船だったのか。

豊岡市の袴狭（はかざ）遺跡で発掘された紀元1世紀ごろの線刻画には、16艘もの手漕ぎ大船団が描かれている。またニゴレ古墳から出土した舟形埴輪はくり抜き船で、丈夫な船底を有し重い砂鉄や鉄滓などを運ぶことが可能であったとみられる。

2. 1世紀ごろの「鉄の道」

「播磨風土記」には「新羅の王子が播磨に来て淡路島を占拠、次々と拠点を広げ、豊

岡の出石にも拠点を置き、円山川河口から姫路に交易ルートを確認した。」とある。

円山川を上り分水嶺は船曳道を通り揖保川に下り姫路を抜け淡路島に至るルートであった。淡路島には製鉄遺跡「五斗長垣内遺跡（ごつさかいと）」があり、近畿最大の鉄鍛造所があつて鍛造・鑄造を行い、農機具や鏃などの鉄製品にして近畿地方に供給していた。しかし理由は不明だがわずか百年間しか操業していない。百年足らずで豊岡の繁栄が終わつたようである。

3. 2世紀ごろの「鉄の道」

- 1) 西から長旅で鉄鋌を運んできた古代人の船団は、丹後半島付け根の久美浜湾の函石浜で休息する。そして浅茂川から竹野川を上がって「大宮売神社」から船を曳き阿蘇海に抜けた。鉄鋌を人が背負わず船に載せたまま曳いたのである。このルートは竹野川沿いを走る現在の「北近畿タンゴ鉄道」の下にある。竹野川沿いには鉄やガラス、翡翠、水晶、辰砂など一大交易地があつたと思われる多くの遺跡がこの船曳道で発見されている。
- 2) 播磨国風土記によれば、この地を最初に支配しこのルートを開拓したのは朝鮮半島からの渡来人とされる。このルートに沿って多数の鉄の鍛造所や玉造り工房遺跡があり、コンビナートとして、鉄・玉・翡翠・水晶などの交易所として大いに賑わっていた。「大宮売神社」は半島の中心にあり、交通の要衝に位置している。境内から発掘された多数の埋蔵物から、京都府の「古代祭祀史跡」に指定された。

4. 丹後半島の繁栄を作つた日本最古の「製鉄・玉造りコンビナート」

函石浜遺跡には出雲や糸魚川から運ばれてきた勾玉や管玉、翡翠、大陸や朝鮮半島からの葉瓷（やくし）、青磁、染付、陶器、中国貨幣（西暦 14 年銘の「新」（8~23 年）時代の貨泉など）などが多数出土した。このことはここが紀元前から文物が丹後半島を越える起点になつていて日本海最大の加工貿易の交易場になつていたことがわかる。

- ・「奈具岡遺跡」：弥生時代中期の 1 世紀ごろ、水晶を加工する技術を持つ日本最古で最大の水晶工場があつた。
- ・「扇谷遺跡」：鉄滓、ガラス滓、紡錘車、玉などが出土した環濠集落で、製鉄工場、玉造工場があつた。
- ・「遠所遺跡」：製鉄炉、鍛冶炉、と共に燃料に使う炭を生産する大量の炭窯や住居跡などが一緒に出土しており、日本最初の大規模な「たたら製鉄所」と考えられ

ている。

5. 5世紀、大型帆船時代になり衰退した丹後王国

3世紀から4世紀、丹後の製鉄原料はすべて朝鮮半島の伽耶から運んでいた。丹後王国が直接半島と交易し、鉄・ガラス・翡翠などで日本海最大の王国になった。しかしこの丹波王国の繁栄は長く続かず、繁栄は2世紀後半から5世紀前半の250年間としている。その理由は応神帝の大型帆船時代の到来だった。

丹後半島という地理的障壁が王国の繁栄を生んだが、日本海に大型帆船が就航しはじめた4世紀半ばには衰退を始める。以降近畿で必要な鉄は敦賀経由になり、継体王朝の湖北の製鉄所が丹後に代って繁栄することになる。

6. 「たたら製鉄」で復活する丹後王国

朝鮮半島からの鉄を絶たれた丹後王国は鉄資源の多様化を求め、5世紀ごろから中国山地で採れた砂鉄を原料とした「たたら式」製鉄を大規模に行うようになった。6世紀新しい「たたら製鉄」の技術で息を吹き返した丹後王国はヤマト国の製鉄工房として復活する。6世紀のヤマトは秦氏などが河内湖の干拓や灌漑事業で多くの鉄製品を必要としていた。

以上

解説資料④ 丹後半島の古墳

坂東久平

「日本海三大古墳」(何れも前方後円墳)

蛭子山古墳(与謝郡与謝野町)	145m	4世紀中頃
網野銚子山古墳(京丹後市網野町)	198m	4世紀末～5世紀初
神明山古墳(京丹後市丹後町)	190m	5世紀

1. 蛭子山古墳(えびすやまこふん) 国の史跡:「蛭子山古墳」

蛭子山1号墳は、蛭子山古墳群を構成する古墳のひとつで、古墳時代前期後半の4世紀中頃の築造と推定される。墳形は前方後円形で、墳丘は3段築成、墳丘長は145メートルである。

墳丘各段には埴輪列が巡らされているほか、墳丘表面には川原石の葺石が認められる。主体部の埋葬施設としては後円部中央において3基が認められており、そのうち中央の第1主体では舟形石棺および銅鏡・大刀などが発見されている。

谷1つを隔てて南50メートルほどの位置には中・小規模の古墳5基からなる作山古墳群(国の史跡)も築造されており、特に作山1号墳には蛭子山1号墳との関連性が指摘される。

2. 網野銚子山古墳(あみのちょうしやまこふん) 国の史跡:「銚子山古墳 第一、二古墳」

網野銚子山古墳は、3段構築の前方後円墳で、全長198メートル、後円部の直径115メートル・高さ16メートル、前方部の幅80メートル・高さ10メートルである。葺石がふかれ円筒埴輪の列が巡る。埋葬施設については不明である。築造時期は古墳時代前期末から中期初頭(4世紀末～5世紀初)と推定される。

(佐紀陵山古墳(奈良市)と、墳型がよく似ており、ヤマト王権との関係が推定される。)

3. 神明山古墳(しんめいやまこふん) 国の史跡:「神明山古墳」

神明山古墳は、前方後円墳で墳丘長は190メートルである。古墳時代中期(5世紀初)に築造されと推定される。丹後半島を貫く竹野川の河口付近に位置する、日本海側最大級の古墳である。

この巨大古墳らは海上から眺めると白色に輝いてよく目立ち、港の位置を示す標識にもなった。

4. 産土山古墳(うぶすなやまこふん) 国の史跡:「産土山古墳」

神明山古墳の直ぐ北に位置する古墳時代中期の直径54メートルの円墳。昭和13年に長持形石棺が露出し、埴製枕に残る頭髪をはじめ、遺骸にそえられた様子がよくわかる形

で豊かな副葬品が出土した。丹後地域における大型円墳の典型例であり、数少ない長持形石棺をもつ点でも貴重である。古墳時代中期(5世紀中頃)の築造と推定される。

5. 湯舟坂二号墳

古墳時代後期の円墳で、径約18メートルある。築造は6世紀後半代と推定されている。この古墳から、**金銅装双龍環頭大刀(国宝)**が出土した事で有名になった。(墳丘は無く、石室が露出している。) 伯耆谷の一番奥にある、車がようやく通れる道を入れていくと低い山の上にある。



6. 竹野川流域の古墳群

竹野川の流域には遺跡が散在しており、丹後半島地域の文化発祥の地という性格を持っている。前述の網野銚子山古墳、神明山古墳、産土山古墳などや、赤坂今井墳丘墓、太田南古墳群などが見られる。それ以外の主な古墳を紹介する。

湧田山(わきたやま)古墳群は、大型前方後円墳を盟主とし、大小の円墳を主体として構成される総数約 42 基からなる丹後地方屈指の古墳群である。一号墳は、全長 100 メートルに及ぶ帆立貝式の前方向後円墳である。

カジヤ古墳は丹後最大級の円墳であり、長径約 73 メートル、短径約 55 メートル、の楕円形の墳丘を持つ円墳である。副葬品は銅鏡・鉄器類・玉類・石製腕飾類等で、特に注目されるのは鋏形石、車輪石、石釧等の石製腕飾類が一括して出土した事である。

黒部銚子山古墳は、全長 105 メートルの丹後では No.4の巨大前方後円墳である。5世紀前半、あるいは4世紀末くらいと推定されている。

7. 赤坂今井墳丘墓

丹後半島の中央部に所在する弥生時代終末期前後(2 世紀末～3 世紀初)の巨大な墳丘墓である。墳丘は墳頂部で東西36m、南北39m、その裾には平坦面を造成し、墓域とし

ては南北51m、東西45m、高さ3.5mという弥生時代終末期前後としては傑出した規模である。(方形墳墓)

この古墳の被葬者が埋葬された時期は、邪馬台国の卑弥呼の時代と重なる。埋葬施設は墳頂部に6基、墳裾の平坦面に19基以上存在し、墳頂部の中心主体である第一主体は長辺14m、短辺10.5mと大規模な墓坑を持つ。木棺は底面が窪む舟底状である。棺内から鉄剣1点、ヤリガンナ1点及び頭飾り・耳飾り一式を検出した。頭飾りは着装された状態で、ガラスと碧玉製で三連に連なっており、布などに編み込んでいたと考えられている。ガラス管玉には、古代中国の顔料で「漢青」の主成分として使用されたケイ酸銅バリウムが含まれていた。

この墳墓は近畿北部の首長とそれに関係する人々の墓と考えられ、中心被葬者は内外の交易、先進物資の広域流通に深く関与し、その政治的影響力を大いに発揮した丹後地域の盟主的首長であった可能性が非常に高いとされる。

8. 太田南5号墳

太田南古墳群は、大小の円墳・方墳からなる総数 25 墓の古墳群である。古墳時代前期の、有力者の墓域で、丹後地方と中国大陸・朝鮮半島との交流が検証できる遺跡とされる。

太田南5号墳は、標高 82 メートルの山の上に築かれた方墳(18.8m x 12.3m)で、4世紀の後半に築造されたものとみられている。

出土した副葬品は、青龍三年方格規矩四神鏡(重要文化財)や、幾重にも布に巻かれていた鉄刀などである。この銅鏡は絹織物にくるまれておりおそらくは木箱に収められた状態で棺内に副葬されたと考えられる。銘文中の中国・魏の年号は「青龍三年」(西暦 235 年)である。これは、魏志倭人伝に、卑弥呼が魏に使節を送ったと伝えられている、景初三年(西暦 239 年)の 4 年前に当たるものである。

青龍三年方格規矩四神鏡(重要文化財)

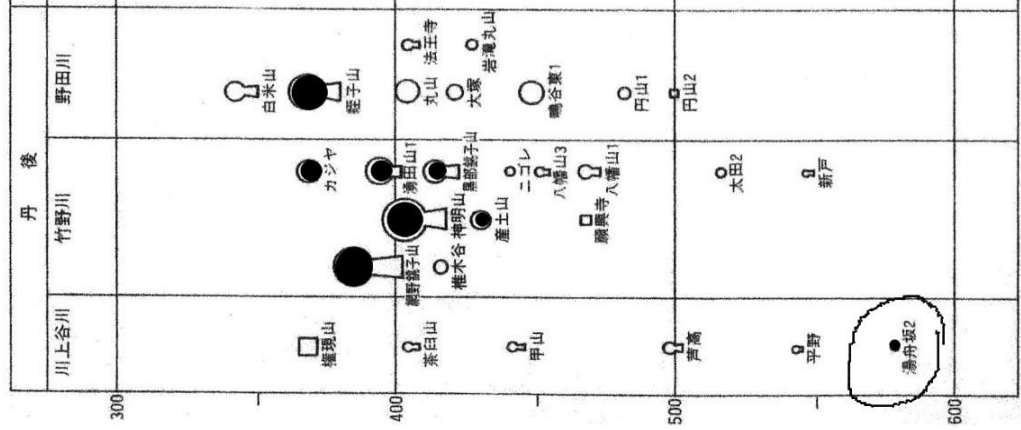
この鏡は、3枚の同型鏡があり、①東京国立博物館、②高槻市安満宮山古墳、③太田南5号墳である。

太田南5号墳の鏡は、仕上げの削り跡から、安満宮山古墳の踏み返し鏡と推定されている。

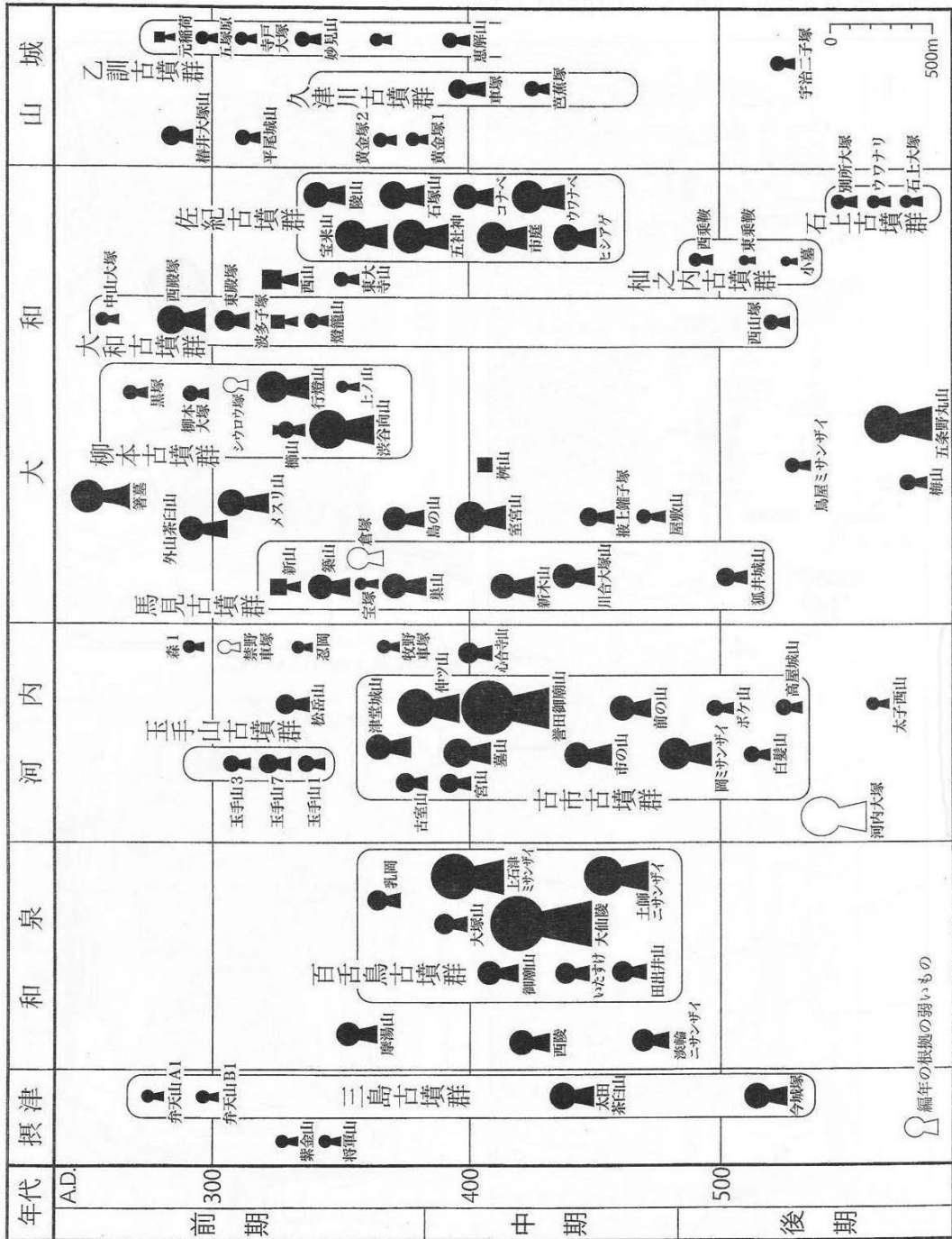
(小山田宏一『邪馬台国時代と丹波・丹後・但馬と大和』より)



古墳編年・丹後



京都府下の主要古墳編年表



畿内における大型前方後円墳の編年《2013年6月補訂》 33巻の八雲古墳

編年の根拠の弱いもの

解説資料⑤ 古代の鉄と遠所遺跡

古代の鉄と遠所遺跡について

I. 丹後半島の鉄に関連して

1. 古代の鉄・鉄器のはなし

日本列島に初めての金属器が出現するのは弥生時代で、朝鮮半島南部からの稲作農耕を生産の基盤とする複合的な文化が伝来した時に始まる。列島では石器時代から一気に鉄器時代に突入した。

(1) 弥生時代

石器と徐々に入れ替わる形で鉄器の利用とその製作が段階を追って発展していった。

- ①弥生時代の初頭に稲作文化の一要素として列島に初めて青銅器と共に鉄器がもたらされた。
- ②前期末（BC200年頃）、朝鮮半島南部からもたらされたと推定される鉄素材を用いて、九州北部を中心に鉄器の製作が始まる。（石>鉄）
- ③中期中葉には、最初は斧や鎌といった小型品が主だったが、この頃になると比較的大きな武器も製作されるようになった。また大型の刀剣類の多くは中国や朝鮮から持ち込まれた。（石>鉄）
- ④後期（1世紀頃）から、利器の主体をなした石器が急激に衰退・消滅し、鉄器が急速に普及する。

鋤や鋤といった木製農耕具に鉄製の刃先が付き、石包丁に代わって手鎌や鉄鎌が出現してくる本格的な鉄器の時代に入った。鉄器は利器に、青銅器は祭祀用具や装身具という使い分けが定まった。しかし、この段階でも鉄素材は列島内ではほとんど生産されず朝鮮半島南部に依存していた。

* 「倭国大乱」は鉄をめぐる起こったのではないか。

使用する武器や生産道具類は本格的な鉄の時代を迎えながら、鉄素材そのものは列島以外に求めざるを得ない状況が弥生時代後期に出現した。鉄素材、鉄器を手に入れるため、西日本を中心とした地方ごとに集団間の統合を急速に押し進め、広範囲の集団の結合を促すことになった。急速に政治性を帯び、内には中核となる勢力を中心とした集団間の支配と従属を、外には他の広範囲の集団的結合との政治的緊張を引き起こしたと推測される。2世紀後半に想定される「倭国大乱」はこのような状況を背景に起こった鉄器時代の本格的な戦争であり、それに畿内勢力が勝利したのである。

(2) 古墳時代

- ①初期（3世紀中葉から）は、技術的には弥生時代の延長上にある。板状や角棒状の鉄資材を比較的簡単に鍛造したものが中心で、武器類、武具類、農具類、木工具類、漁具類などが作られた。
- ②中期中葉（5世紀前葉）からは、鍛造技術の革新が進み武器、武具、馬具から農工漁具にまで及んだ。しかし、中期においても鉄素材は列島以外の主に朝鮮半島南部からもたらされていた。
- ③後期後葉には、製鉄が行われた直接の証拠である製鉄炉がみられる。この時期から7世紀前半にかけての製鉄炉は福岡、島根、広島、岡山、滋賀といった西日本の各地で発見され、日本海側では砂鉄を、瀬戸内海や滋賀では鉄鉱石を原料に鉄生産を行い、鉄素材の自給率を高め、鉄器文化の新たな段階に入ったといえる。

*では列島での「鉄の生産」はいつごろから始まったか。

鉄の生産の開始がどこまで遡っていけるかは現在よく分かっていない。真の鉄器時代を、鉄生産から鉄器製作までを自立的に行える段階と定義するならば、早くて古墳時代中期遅ければ古墳時代後期のことである。

ここ丹後半島の遠所遺跡で発見された後期前葉～中葉（5世紀後葉～6世紀前葉）の木炭窯が、周辺から多量に出土した鉄滓から、製鉄に伴うものと推定されているように5世紀代まで遡る可能性が高い。（後述）

2. 鉄の力：鉄を制するものは国家を制す

鉄に関連する技術はヤマト王権中枢によってほぼ独占的に取り入れられ、特定の工房でその威力を発揮した。列島外の高度に熟練したヒト・モノ・情報をいかに安定的に入手しそれらを独占的に活用するかが、ヤマト王権中枢がそれぞれ在地の支配によって立つ首長層を統合していく上で不可欠の存立基盤の一つであった。

丹後の鉄生産は、新来の製鉄技術の導入に熱心な古墳時代中期のヤマト王権中枢が、丹後の砂鉄に注目し、積極的にこの技術を丹後に移植する形で開始された可能性が強い。鉄は生産と軍事の要で、富国強兵を目指す王権にとって、鉄と鉄の生産は垂涎の的だったからである。

丹後へのヤマト王権による支配が強まった背景には、日本海ルートの支配に加え、鉄による富国強兵策があったものと考えられる。

*ヤマト王権による中央集権体制へ

大王を頂点とする有力首長層が各地の在地首長層を政治的に編成していた首長連

合とでも呼ぶべき政治体制が崩壊し、それまでは首長の下にあった民衆層をヤマト王権が直接的に支配し、在地首長層を官人化していくような中央集権体制に向けての政治的行動がこの古墳時代後期から始まる。

II. 遠所遺跡について

1 遠所遺跡群調査の概要

(吉岡時夫氏の掲載文を引用した。但し漢数字をアラビア数字に変換した : 塩本)

農林水産省近畿農政局が計画推進する「丹後国宮農地開発事業・弥栄町字木橋鴨谷団地造成工事」に先立ち、京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施した。遺跡は弥栄町の西端、ニゴレ古墳（五世紀中頃築造）の南側の谷奥、南北 800 米・東西 400 米の範囲に広がっている。

調査は 1987（昭 63）～1990（平成 2 年 11 月）現在も続いている。平成 2 年 8 月 10 日現在説明会資料によると、製鉄炉 8。鍛冶炉 13。炭窯焼土坑 211。須恵器登窯 6。住居建物跡 47。流路溝等 9。古墳 22。計 316 という規模の大遺跡群である。

遠所遺跡群調査の成果について、埋文調査センター増田孝彦主任調査員の現地説明の要点は、次の 6 点であった。

- ①遠所遺跡群からは 5 世紀～13 世紀にかけての各種の遺物が出土している。製鉄炉はじめ、炭窯・住居跡など鉄生産に関する一連の遺構があり炭窯については四型式がある。
- ②製鉄炉は古墳時代後期 6 世紀後半のものと奈良時代後期（8 世紀後半）が確認できる。鉄生産に必要な炭窯から見ると 5 世紀～6 世紀初頭まで遡る製鉄遺跡の存在も考えられる。
- ③製鉄原料の砂鉄貯蔵穴、奈良時代後期の製鉄炉と鉄滓の検出等から、原料（砂鉄）－精錬－鍛錬－製品の一貫工程を遠所遺跡群で行っていたことが判明した。
- ④製鉄研究は、東日本 7 世紀後半以降、西日本 6 世紀後半以降の資料をもとに進められているが、今回の調査は製鉄開始の時期、炉や炭窯の構造と年代、砂鉄を原料にしていることから製鉄史上貴重な資料提供になる。
- ⑤製鉄と地名の点から弥栄町に「芋野」・「井辺」という大字名があり、字吉沢にある早尾神社の摂社に金山彦神が祀られていることから、鋳物師との関係が指摘される。又宮津市智恩寺と成相寺に現存する国指定重要文化財の正応 3（1290）年銘、鉄湯船（経 172.5 cm、高さ 63.5 cm）はその銘文から、もとは弥栄町内の興法寺、および、等楽寺にあったことが知られており、鎌倉時代の製鉄が確実視され

ている。遠所の製鉄遺跡とあわせると、弥栄町の長い製鉄史をうかがうことができる。

- ⑥丹後半島で古代製鉄を考えると、峰山町扇谷遺跡（弥生時代前期末－中期初頭）の鉄斧、鍛冶滓が出土しており、深い環濠を掘るために鉄製の道具を使用したのではないかと考えられる。遠所遺跡の調査とあわせると、丹後という地域は、日本での鉄器使用と鉄生産を始める時期、場所を考える上で重要な地域である。

2. 古代製鉄史における遠所遺跡の意義（和田晴吾氏の「古墳時代の生産と流通」より）

「現在は、弥生時代や古墳時代の素材としての鉄は、朝鮮半島南部から持ち込まれていたと考えられており、日本列島で鉄を作りだしたのは、製鉄炉が発見されるようになる古墳時代後期後葉の6世紀後葉からだというのが定説である。」

遠所遺跡で発見された後期前葉～中期（5世紀後葉～6世紀前葉）の木炭窯が、周辺から多量に出土した鉄滓から、製鉄の伴うものと推測されているように、それは5世紀代まで遡る可能性が高い。この時期は、鉄器製作技術の革新期にあたり、また、須恵器という、鉄生産と同じく高熱を取り扱って土器を焼く技術の導入期にも当たる。状況証拠は早ければ5世紀前葉、遅くとも5世紀後葉には少なくとも試行的鉄生産が列島でも開始された可能性を示している。もし、この時期をさらに遡って鉄の生産が行われていたとしても、それは極めて小規模なものであったと思われる。」

以上

文献引用：

- ①和田晴吾氏の「古墳時代の生産と流通」（吉川弘文館）
- ②吉岡時夫氏の「遠所古代製鉄遺跡についての考察」（掲載文）

参考：（日立金属 HP より）

今のところ、確実と思われる製鉄遺跡は6世紀前半まで遡れますが（広島県カナクロ谷遺跡、戸の丸山遺跡、島根県今佐屋山遺跡など）、5世紀半ばに広島県庄原市の大成遺跡で大規模な鍛冶集団が成立していたこと、6世紀後半の遠所遺跡では多数の製鉄、鍛冶炉からなるコンビナートが形成されていたことなどを見ますと、5世紀には既に製鉄が始まっていたと考えるのが妥当であろう。

歴文資料その⑥

丹後 七姫伝説に思う

丹後を代表する印象的な風景として、誰もが知る天橋立。丹後風土記には「イザナギノミコトが天と地の間に架けた梯子が倒れてきた」と丸でその様子が浮かぶ様な神話の一節がある。丹後半島には神話のほかに、民話や伝説・口伝など追い求めていくと幾つかの舞台が見えて来る。縄文時代からの考古的文献も多く、物語の背景には何があるのか、謎とも思える丹後の秘められた姿を考えてみたい。

1、乙姫伝説（浦島伝説）

時は雄略天皇の御代（5世紀頃）、丹後の漁師 浦嶋子が沖に出て釣りをしていたが、三日三晩一匹の魚も釣れません。諦めて竿を上げると、そこに五色の大亀が現れ眺めているうちに眠ってしまう。目が覚めると亀は美しい乙姫の姿に変わり、二人は常世の国（竜宮城）へ赴き楽しい日々を送ったそうなの……。

里心のついた浦嶋子は故郷に帰り、決して開けてはならない玉手箱を開けると、たちまち老人となり三百年の時が経っていたと言うお話。

8世紀に書かれた丹後風土記の逸文に「水之江嶋子」と言う人物が主人公の文脈があり、日本書紀にも記述がある。伊根町の宇良神社の祭神はこの嶋子であり、網野町にも嶋子神社があって側に乙姫と出会った「福島」が展望でき乙姫の福島神社がある。

2、ガラシャ夫人（伽羅奢）

明智光秀の三女。織田信長の勧めで宮津城主・細川藤孝（幽斎）の子 忠興の正室に嫁す。本名は玉子。本能寺の変で事態は急変。丹後弥栄町味方で幽閉。キリスト教の信仰に救いを求め、ガラシャの洗礼名を受ける。稀有の美女でマリアの再来と言われた。

細川忠興は稀にみる嫉妬心が強く、夫人に対する妄執から他行（外出）を許さず、家老すら入室を禁じたとある。関ヶ原合戦前夜、西軍の人質の要求を拒否し、屋敷に火を放ち禁令の自殺によらず、家老に胸を突かせ絶命する。享年 38才。

死後、「丹後王国の女王グラツェ」と呼ばれ、弥栄町に石碑が建つ。大宮町 善王寺には義妹の「菊」が菊岡神社に眠る。

辞世の句：散りぬべき時知りてこそ世の中の花も花なれ人も人なれ

3、小野小町 美女伝説

波乱に満ちた「小町」の生涯には謎が多く、この地方に伝わる物語も口伝による伝承としてのものであろう。情報機能の無い室町から江戸期には、「語り部」と言う漂泊の旅人が存在して伝承的な話題を残し、歴史的事実として転化した過程が想像できる。

九世紀中頃の人。生没年不詳。秋田 出羽の国の人。小野良寛の子。小野篁の孫とも。仁明天皇（833～850）の「更衣」（天皇の衣替えをする女官）として仕える。絶世の美人として、「五節の舞姫」「宮廷女房」「采女」とも言われ、後年、楊貴妃・クレオパトラと並ぶ美女伝説を生む。

醍醐天皇（897～937）の頃、古今和歌集で歌人として世に出る。三十六歌仙の序に名を連ねた六歌仙となる。「小町」の時代、時代に詠んだ哀調と情感に富んだ代表的な歌に往時を偲ぶ。

思いつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを

「夢の恋を詠う」後世、拒む小町の異名がある。言い寄る数多の貴公子たちを寄せ付けなかったが、仁明天皇に対する恋慕の情があったと言う。また、同時代の美男子 在原の業平に思慕を募らせたとも。山科 欣浄寺に千通の恋文を埋めた文塚がある。

色見えでうつろうものは世の中の人の心の花にぞありける

「愛の不信を詠う」叶い難い愛と身の不運を主題とした憂愁の雰囲気が漂う。

花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめし間に

「容色の衰えを嘆く」晩年は零落し諸国を流浪し、死後、髑髏が野ざらしになり、目の中からススキが生えていたと言う。左京区 補陀落寺に小町老衰像があり、眠る。

丹後 大宮町には、天橋立を目指した途中、当地の住人 上田甚平衛と出会い五十河を訪れ、この地で亡くなったと言う。五十河には小町塚があり、小町が開基したと言う妙心寺がある。小町の伝承は各地にあり、後世 能狂言など創作芸能により美女伝説は全国に広まりを見せる。

京都 山科には当地の豪族 小野一族が権勢を誇り、小町の居宅もあったが、現在随心院として句碑・襖絵・屏風・晩年の像など往時を偲ぶ名品が並ぶ。

4、羽衣天女伝説（豊宇氣比売）

昔、磯砂山の真奈井で八人の美しい天女が水浴びをしておりました。その様子を側で見ていた老夫婦が一人の天女の羽衣を隠してしまったため、その天女は天に還ることができなくなってしまい、やむなく老夫婦の養女として暮らすことになりました。

天女は稲作・養蚕・酒造の技術を伝え、老夫婦はすっかり裕福になりましたが、ある日「汝は我が子に非ず」として追い出してしまいました。悲しみに暮れた天女は奈具の村に移り住み猟師の三右エ門と言う男性と結ばれ娘を授かります。丹後風土記に胸中を詠んだ歌が逸文にのこされています。

安住の地、奈具には奈具神社が、峰山町には天女が水浴びをした「女池」があり、池をかき回すと雨が降ると言う伝説があります。登山者にはご用心、ご用心。

この物語りには渡来人の文化の流入と偏見視する村人たちの確執が垣間見えるようです。

5、安寿姫物語（山椒大夫のヒロイン）

由良に伝わる伝説。森鷗外の小説「山椒大夫」の題材となる。「山莊太夫」とも。陸奥の国の岩城判官正氏は讒言により筑紫に流されるが、その子安寿姫と厨子王は母と共に父を尋ねて直江津に至る。そこで土地の人買い「山岡大夫」に騙され母は佐渡へ、二人は丹後由良の「山椒大夫」に売られ奴婢として酷使される。安寿姫は厨子王だけでも助けたいと太夫の目を盗み逃がす事に成功する。山椒大夫に怒りを買った安寿姫は池に入水自殺を計り自死する。厨子王は京に上り出世し、丹後・越後・佐渡を賜り母子再会を遂げ、山椒大夫を討ち仇を報いる。

6、川上摩須郎女（カワカミノマスノイラツメ）

往古、丹波の国の国王として君臨していた「丹波道主命」の妻。丹波の国の豪族川上摩須の娘として道主命の妻となり一男三女をもうけ、その息女ヒバスヒメは垂仁天皇の後となり、景行天皇をはじめヤマト姫など四男一女を生む。

この一大勢力の遺跡が久美浜須田 伯耆谷に無数に散在している。孫娘が皇后になった事を喜び川上摩須により甲山に熊野神社を建立したと伝わる。

7、静御前 伝説

源義経の寵愛を受け、白拍子（神前に歌舞を奉ずる遊女のこと）から静 御前として愛妾となるが、後年 頼朝の逆鱗に触れ、義経の吉野逃亡の哀話として語られ悲劇のヒロインとなる。

宿していた義経の子は生後殺され傷心の静は故郷の網野に戻り、20歳の短い生涯を終えたといわれる。村人たちは、この悲恋の主を「静神社」を建立し御霊を慰めたとする。

静の庵跡には「生誕の地の碑」、義経が舟を着けた「入り舟の浜」「沖の飛び石」がある。

8、穴穂部間人皇女（アナホベノハシヒト）

穴穂部間人皇女は欽明天皇の息女で用明天皇の後、厩戸皇子（聖徳太子）の生母です。

6世紀末、中央で蘇我氏と物部氏の権力闘争が激化した頃、戦火を避けるため一時日本海沿岸部に避難される。何年か後、政情が落ち着き都へ帰る折、世話になった里人たちへ感謝の意をこめて自分の名前を里に与えましたが、里人たちは「畏れ多いこと」として苦慮し、間人の字を皇女の御退座に因んで「たいざ」と読み替えこの地の地名とした。

現地では単に間人皇后と呼ばれているが、間人の名をもち、かつ天皇の後となった皇女は二人おられ、学術上、他方は間人皇女（孝徳天皇后）と呼ばれている事から、ここでは混乱を避けるため穴穂部間人皇女とする。

あとがき

時代は数々の伝承を生む。後世の識者たちが歪曲し文化のタネとして現世に伝えてゆく。そこにロマンが生まれ読者は空想的な空間に遊ぶことになる。

私は乙姫伝説に古代の海人たちの遭難事故を重ね、帰らぬ人へのロマンティシズムを重ねてしまう。飛躍すれば出雲の神話から大国主命の唯一のパートナー少彦名命が突如、常世の国へ姿を消す下りに、物語の発想を独り勝手に想像を広げてしまう。

山椒太夫の安寿姫の悲劇、小町・ガラシヤ夫人・静御前・羽衣伝説など時代に翻弄された栄光・転落・自死の転変の人生に、現世の闇の部分が投影されている。この物語の主人公は全て女性であり美人伝説としても現代人の心に生きている。

「美人薄命」とはこれらの伝説から発した俗言だろうか。美人で無くて良かった。ゴメン。

以上